

中江藤樹 心のセミナー

田中清行

二月十五日、安曇川公民館で開催され、九十名の参加を得ることができました。

●講師 廣瀬 童心 先生

(まなざし 童心塾塾長・実践人の家理事長)

●演題 「藤樹先生の教えを今、ここ、自分に活かそう」

●講演の要約

昨年私は実践人の家で、森信三先生の書架を見ました。八千冊も蔵書があり、その中に松下亀太郎先生の『物語中江藤樹』を見つけました。嬉しかった。この本を読んで、ときめき、感動しました。一つは、藤樹先生は九歳の時、祖父と故郷を出て、十一歳の時「大業」を読んで志を立て、修身を学び、これを一生貫かされたこと。二つ目は「あかぎれ膏薬」の話……。三つ目は「脱藩」の話。母親が年老いて小川村に一人である。役人は替りがあるが、孝行する替りはない。そこで死を覚悟して脱藩された。本当に実践の人です。中江藤樹は江戸時代随一の学者です。

大野了佐の話。物覚えが悪い彼一人を教えるために医学の教科書まで作り、自分の命を削ってまでも教えられた。了佐は母が長患いで死んだので、医者になつて病気を治したいという志を持っていました。

小川村では藤樹先生が来られるだけで場の空気が和らいだそうです。馬方又左衛門の話……。藤樹先生の感化力、霊性には感銘を受けます。

先生は、三十七歳の時、王陽明の『陽明学全集』三十八巻を入手し、熟読して、自分の思想が百年前の王陽明の思想と一致していることに感激されます。そして、先生四十一歳の時に藤樹書院が完成し、その六か月後に逝去されます。

中江藤樹の根本思想は、「孝」。親、その親、そのまた親……と辿っていくと、生命の根源に行き着く。それが「孝」、親さまで。私たち生命は皆、「孝」から出た兄弟姉妹とか家族とか……みたいなものだから共に「愛敬」しなければならぬ。「明明徳」(明德を明らかにする)、「致良知」(良知に至る)に努めなければならぬ。そのためには「五事を正す」。すなわち「貌、言、視、聴、思」を正さねばならないと言われています。これは実学です。

童心流に五事を正すを考えてみると、「今、ここ、立腰、ありがとう」です。立腰は腰骨を立てること。そうすることにより意識が天につながり、自分が主体的になる。自然に「ありがとう」が出て



きます。五事を正すことは大事ですが、「孝」の教えを時々学んでいないと形に流れてしまうと思います。

森信三先生の「全二学」はいのちの「自証」であり、久保田暁一先生は「だるま通信」で「全一学」は「孝」とつながると言われています。

藤樹先生は「転」の人でした。農から士に転じ、商に転じられた。

思想面でも朱子学から陽明学に転じ、藤樹学に転じられた。先生がもつと長生きされていたら、自然(あるがまま)の方に転じられたと思います。晩年には「明德仏性」と言われています。

藤樹書院に行くとき藤樹先生の波動を感じます。藤樹先生は、慈愛溢れる人でした。慈愛がコップの水とするとそれがいつも溢れていました。

その献身的な生き方が多くの人の心を打ち四百年経った今もなお、人々に感動を与え続けられているのだと思います。

生き方を学ぶ

「実践人」学習会 徳丸和枝

「藤樹先生こそ徳川三百年の中でも最深の学者である」と紹介されたのが、森信三先生です。

国民教育者の師父と仰がれた森信三先生は、「真理は現実の唯中にある」と開眼され「実践(する)人」を提唱、創設されました。

その後、賛同する方々によって森先生のご著書や箴言を通して学び合う読書会が、全国に展開されています。

ここ高島においても久保田暁一先生が発起人となって、三月に実践人高島の会が発足致しました。

森先生のご著書をテキストに、読み合った会員が集い、語り合い、また、聴き合い交流を深める会です。例会は月一回、安曇川公民館で開催しています。

私は集まりの中で思うのです。同じ一冊の本を読み合う中で、自分の感じたことを聞いていただけのことでもさることながら、異なった職種分野の、人生経験を持った方達からのお話を傾聴できる機会は、自分の生活に「気づき」をもたらしてくれそうです。一つ、新しいことを発見した！そんな喜びを持って帰れる、と。ご興味を持たれた方、一度例会にいらっしやいませんか、お待ちしております。